

### 「言霊学を学ぶために」

私たち日本人は、これまでの西洋的な思想の影響により、この現代社会において、常に何かをするよう求められ、何者かになるよう押し付けられてきました。仮に時間的、経済的に余裕があっても、先々の不安から、心の休む暇のない状態が続いています。そして、そうした不安を解消するために、知識や物のため込み、自分を防御し、あるいは満足させようとします。そうしたなかで、いわゆる成功者といわれる人が生まれ、私たちはそれにあやかろうと、様々なノウハウを身に付けてきました。ある方法がうまくいかなかった場合、次はこれというように、結局は今の自分に何を蓄積するかがベースになっています。

言霊についての教えも例外ではなく、一般的な成功哲学や処世術と同じような見方をされてきました。つまり、ある種のノウハウとして、言霊の知識を身に付けばうまくやっているといるという考え方です。それにより、根本的な理解がなされないまま、特定の言葉が独り歩きし、日本語はすばらしいという感情論だけが先行するようになりました。しかし、言霊学は知識でも処世術でもありません。そもそも個人や組織の欲望のために利用されるものではないのです。

西洋的な学びの方法を<向上の道>とすると、言霊

学のそれは真逆となります。蓄積したものをすべて捨て去った後から本当の学びが始まります。知識の積み重ねといいますが、「積み」を「罪(つみ)」とも表現します。すべてがなくなっても残るもの、それは「空」の世界です。本来「空」から先の展開は、<sup>すめらみこと</sup>皇尊の仕事でした。自我の<sup>しんてい</sup>真諦を獲得した天皇にあってはじめて許されるものであり、神業とはそのようなものを意味します。私たちがこれを学ぶためには、これまでの知識や先入観を捨てねばならず、自分が身に付けたものに同化させることで理解しようとすると、それは、もはや似て非なる異次元階層の概念に成り下がります。言霊が実現しない理由もそこにあります。

神道が「祓いに始まり、祓いに終わる」とし、祓いの後に決意表明するのは、そのような理由からです。西洋的な進め方の問題が絶え間ない<向上の道>にあるとすると、言霊学は<向下の道>を歩ませるといって、大いなる変革の道標を提供されることでしょう。その上下切り替えのポイントが言霊学へのスタート地点となります(言霊大学基礎編テキスト参照)。

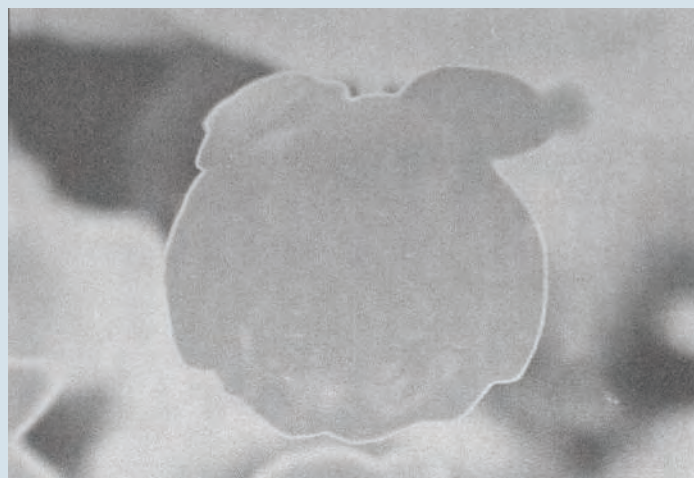


Photo by Minoru Ichige